

死神とのドタバタ劇

「ツイッターで、毎日『死にたい』ってつぶやいていたら、『殺してあげます』みたいなダイレクトメッセージが来たんですよね」

十年ぶりに再会したスイカちゃん（仮名）は、喫茶店でお茶を飲みながら、そんなことを言うのだった。出会ったころはまだ十代だったが、現在は結婚して、すっかり大人の女性になっていて。言葉遣いは丁寧すぎるほど丁寧で、清楚な服に、背筋もピンとしていた。そのしっかりした外見とは裏腹に、自殺願望は強いようだ。当ても激しい自殺未遂をくり返していたが、今もそれは変わらないらしい。とはいえ、理由は昔と違っていた。

「十代のころは、とにかく何か怒ってる状態。もう嫌だ死にたいって気持ち。今は申し訳

なさとか、責任を取るためには死ななきゃみたいな、大人の理由にシフトした感じです」

スイカちゃんが結婚したのは、五年前。自分の気性の荒さを自覚していたから、穏やかな男性に惹かれたという。ところが、その後勤めた会社でパワハラにあい、情緒の不安定さが加速したようだ。

「一年半前に鬱になって、通院を始めたんです。自殺したいのは、夫のことが好きだし大切だから、『いなくならなきゃな』という気持ちですね。私がいる限り、夫は私の面倒を見ないといけないじゃないですか。もし離婚したとしても、夫がいない苦しみを私が味わうことになる。私が苦しまなくて、夫にも迷惑をかけないためには、私がいなくなるのが一番手っ取り早いです」

もちろん、夫側がそのように思っているわけではないだろう。これまで、スイカちゃんが自分の首に包丁を突き付けたときも、夫は必死になって止めている。夜通し泣いたり、半日ほどダンボールのなかに立てこもったときも、夫は黙って見守っていた。

そして冒頭の、ダイレクトメッセージである。「死ねるんだったらお願いしよう」、そう思ったスイカちゃんは、なんとその男に会いに行ったそうなの。

ツイッターを使って自殺志願者に近づき、実際に殺害する事件は、二〇一七年に起きたばかりだ。自宅アパートで男女九人を殺害した白石隆浩（当時二十七歳）は、すでに死刑判決を受けている。スイカちゃんが男と会ったのは、その事件のだいぶ後だが、今もツイッター上には、自殺志願者を募る殺人鬼が生息しているということだ。そして、死にたい人も多いのだろう。

「自分一人でも何度か死のうとして、樹海に行こうと思ったこともあったんですよ。でも、意思が弱いから完遂ができませんね。その人は、お金を渡せば殺してくれるという話だったんです」

やりとりは、最初のメッセージから、すぐに別のアカウントへ移行。足が付かないように、具体的な話は、会ったときに直接することになった。

新宿のとある喫茶店で待っていると、男が現れた。髪はボサボサで、服も綺麗ではない。元ホームレスで、住所不定無職の三十五歳だという。

「暗そうな人です。印象に残らないタイプ。おじさんなのか、お兄さんなのかもわからない。町を歩いていてすれ違って、気づかない感じですね」

その表現が、妙に生々しい。

「いくら出せますか？」と聞かれて、五万円って答えたんですよ。そしたら、『実行するまでに一カ月間くらい隔離して行方不明の状態にするから、それまでの間、かくまう場所や移動費や生活費とか、元の携帯を破棄して、飛ばしの携帯を持たせる』らしくて、経費が掛かるみたい。『五万円じゃ足りないから、ほかの人と抱き合わせでやらないと採算取れない』と言われたんです」

男にとっては、それが商売なのだろう。

「すでに何人が殺してると言っていたけど、果たしてどこまで本当で嘘かはわからない。今思うと、詐欺かなという気もするんですよ。『どうやって殺すんですか？』って聞いたたら、注射と言われたんです。日本には、所有者のいない土地が存在していて、遺体はそこに持っていくと言っていました。私は詳しくないので、本当にそんな土地があるのかもわかりません」

確かに、お金だけ取って、実際には殺さない可能性もあるだろう。被害者にしても、事情が事情だけに、警察には駆け込めないはずだ。スイカちゃんも、今となっては疑いの気持ち

のほうが強いらしい。とはいえ、やたら細部が具体的でもある。

どちらにせよ、スイカちゃんは今、私の目の前にいるわけで、結局は殺されずに生き延びたということだ。一体、どのような展開があったのだろうか。

「その男と雑談しているときに、趣味を聞かれたんです。私は、お人形が好きで、絵を見るのが好きで、音楽を聴くのが好きで、今は鬱で読めなくなっちゃったけど本を読むのも好きだった。そういう話をしていたんですね。そうしたら、『そんなに趣味がたくさんある人は、大丈夫なんじゃないかと僕は思います』と言ってくれたんです。本当に死ぬ人は、趣味を聞かれても何も出てこない人が多いみたい。『旦那さんもいるし、生きるんじゃないですかね』みたいなことを言われた。当時は、死ななきゃ、死ななきゃ、ってそればかり思っていたけど、その一言で、そうか生きていてもいいんだなって思えた。それで、結局、依頼はしなかったんです」

怪しい殺人鬼と思いきや、一転して、ちょっといい話である。しかし、スイカちゃんはそこまで樂觀的ではないようだ。

「私と話してて、意思が弱いことがわかったんじゃないかな。途中で逃げ出して、足が付いたら迷惑だろうし、リスクヘッジの部分もあるんでしょうね」

確かに途中で逃げられたら、逮捕される可能性も高まるだろう。が、スイカちゃんの話は、そこで終わらなかった。

「初めて会った人に、『あなたは死ねないから、生きていたほうがいいですよ』なんて言われたことが嬉しくて、その人のことがすごい好きになっちゃったんですよ」

——へ？

私はおもわず、コーヒーを飲む手が止まった。自分のことを「殺してあげましょう」と言っただけで現れた住所不定無職の男に、恋をしてしまうとは。予想外すぎる展開ではないか。

当時、鬱病で退職していたスイカちゃんには、わずかな貯金と、膨大な時間があった。一方、相手は無職である。

「マックスのときは、週二回は会ってましたね。相手も暇だから一日中LINEしてだし、私から誘って奢ったりしてました。全然カッコイイとかじゃないんですけど、セックスがすごくて、一晩で六回とかするんですよ。そういうところが良くて。貯金も減っていくのに止められなくて。一時は夫と別れて、その人と暮らそうかなと思うくらい好きでした」ととても自殺を考えた人間と、自殺幫助しようとした人間とは思えないアグレッシブさだ。

ところが、二カ月も経つと、パツタリ連絡が取れなくなったという。パニックになったスイカちゃんは、なんと夫にすべてをぶちまけた。

「今、好きな人がいて、その人と連絡が取れなくなっちゃって、すごく苦しいの」って、夫に伝えたんです。私の電話番号だと着信拒否されてるから、あなたから電話してってお願いした。今思うと、本当にどうかしてる。夫も夫で『わかった』と言って。最初はもちろん、相手も知らない番号に出ないじゃないですか。留守電にメッセージを入れてもらって、折り返しかかってきたんですよ。私は夫が電話しているのを横で聞いてて……」

かくして夫は、「スイカの夫ですけど、うちの妻がお世話になっております。スイカさんがあなたに会えなくてすごく苦しいらしいので、会ってあげてもらえませんか」と、伝えてくれたらしい。カオスな展開だ。

「うちの妻がお世話になってます」という言葉を、ここで使うんだって思った。夫を見ながら、何やってるんだろうこの人って、自分が頼んだくせに思ったんですよね。そこから徐々に魔法が解けた。私のためにそこまでやってくれる人はほかにいないから、やっぱり夫が一番素敵なんだなと思いました」

そりゃそうだろう。底抜けに優しい旦那さんだ。

結局スイカちゃんは、その男とまた会い、また着信拒否され、また追いかけるを三回繰り返して今に至るといふ。大変なのめり込みようだ。

「好きの形が違うんですね。夫は居てくれるだけで良くて、一生一緒に居たい人。その男とは、浮かれあがってお祭り騒ぎ。どちらにせよ自制心がないからそうなるんです」

それにしても、死にたかったスイカちゃんが追いかけて、死神男が逃げていくとは。しかも、そうなった原因は、スイカちゃんにあるという。彼女は、鬱病で仕事を辞めてから、毎晩酒を飲み、睡眠薬を飲んで寝る生活を送っている。酒と薬漬けで、一日の大半が酩酊しており、記憶がほとんど飛んでいるようだ。そのため、何度も同じ質問を繰り返してしまうのだという。

「昨日も夫に『去年のクリスマス何してたっけ?』と同じ質問してました。でも、夫は普通に答えてくれるんですよ。その男にも同じ質問を何度も何度もしたら、『毎回、同じ回答をする俺の身にもなってくれ。俺はロボットじゃない!』って怒られたんですね。同じ質問を繰り返すことが、人を不快にさせることだって、それまで知らなかったんです」

スイカちゃんの生い立ちは壮絶で、両親のパチンコ依存、ネグレクト、親が外国籍である

ことを隠されていたなど、社会問題のデパートのような人生を送っている。根本にある不安定さは、そうしたことも関係があるのだろう。

「ちゃんとしなきゃと思う部分と、全部ぶっ壊してやりたい気持ちがあって、心が一つにまとまらない。別々の感情が、ずっと綱引きをしているんです。その男に、『あなたはちゃんと言いたいと言うけど、そもそもちゃんとできない人間性なのに、ちゃんとしようとするから色々とおかしくなる』と言われた。自分の生い立ちに引っ張られていることとか、持っているものと求められているものの差が、どれだけ大きいかを指摘されて、俯瞰で物事を見られるようになった。その人と会ってから、少し生きやすくなったんですね」

スイカちゃんにとっては、学びある出会いだったのだろう。しかし、男は限界だったようだ。

「最終的に彼からは、『君と話していると自分の価値が下がる。俺は医者でも教師でもないから、同じことを言われたくない。病気を治してから出直してこい』と言われました。病気がじゃなかったらお前と会ってないよ！』と思いましたが」

強烈さにおいて、スイカちゃんが勝ってしまったのだろう。死の淵を歩いている人には、ある種のパワーがあるものだ。

——なんか全力で生きてる感じがする。

「それ、よく言われます。傷つくことって、すごく楽しいんですよ。自傷行為みたいに、痛みがあると生きてるって感じがする！」

やはりスイカちゃんは、ただ者ではない。

「私思うんですけど、メンヘラは全般的に、ぶつかってぶつかって全力で傷ついて生きてるからメンヘラになるんですね。ぶつかることを避ける人だったら、そもそもメンヘラにならない」

一連の出来事を聞き終えた私は、スイカちゃんが、ただただ遅しく見えた。この世で、もっともまっすぐに生きているのは、実はメンヘラなのかもしれない。

自信を持つ難しさ

東京都の外出自粛要請が解除された日、久々にポチちゃん（仮名）に会うと、目がくっきり二重になっていた。ポチちゃんは写真の被写体ではなく、私の個展によく来てくれる女性だ。小柄で少女のような雰囲気だが、若くして人妻でもある。

「給付金の十万円が整形しようかなくて。最初は冗談で言ってたんですよ。でも夫に話したら『いいよ、やれば』って言うから」

なんとコロナ禍における特別定額給付金で美容整形をしたらしい。手術を受けたのは二週間前。腫れはだいぶ引いていた。手術後すぐの写真を見せてもらうと、まぶたが酷く腫れあがっていたが、埋没法だと術中も術後もまったく痛くないのだという。医療の進化に驚いた。

この自粛期間中に、美容整形をする人が増えているという話は聞いていた。仕事もストップし、人にも会わないからちょうどいいのだろう。けれど、それは主に水商売の女性たちの話だと思っていた。人妻のポチちゃんが整形をする理由はなんだろう？

「仕事を辞めて鬱になったんですよ。引きこもりになっちゃった。その後、すぐに自粛要請が出たんですよね」

そういえばポチちゃんは、たびたび安定剤を飲んでいた。鬱が酷くなってすぐに自粛なら、タイミングが良かったのではないかと思うが、そんな簡単な話でもないらしい。

「それが逆に酷くなっちゃって。仕事もなくて外にも出られないと、気分転換ができなくてストレスになるんですよ。自粛期間中って、外に出たら死刑みたいなピリピリした雰囲気あったじゃないですか。余計に鬱が酷くなった。人間って仕事してないとダメになるんだなって思いました」

ポチちゃんは、以前から仕事が続けられないことに悩んでいた。去年ネットカフェのバイトを辞めて、図書館員の仕事を始めたばかりだったが、それも一カ月で辞めてしまったらしい。

「結局また仕事を辞めて、ダメだなと思った。なんで続かないんだろう。せっかく条件のいい仕事だったのになら、どん底みたいになっちゃった。人って自分を変えたいときに、いつもと違うことをするじゃないですか。私の場合は整形に辿り着いたんですよ」

確かに顔を変えれば、気分は大きく変わる。服を変える、メイクを変える、引っ越しをする、旅に出る、そういうものに近いのかもしれない。

とはいえさすがに整形のハードルは高かったようだ。昔よりカジュアルになったとはいえ、健康な身体に手術をするのは勇気がいることだ。

「それまで整形は自分と関係ないことだと思ってたんです。立ち入っちゃいけないゾーンな気がして怖かったし。病院に予約を入れたときも罪悪感があった。でも、やりたいし。こうなったら明るく考えるしかないやって」

そうは言っても、ポチちゃんは整形など必要がなくていいくらいに可愛い。元々の目が一重だったか奥二重だったか、私には思いつかないくらいいい気にならないことだった。鬱がきっかけとはいえ、ポチちゃんが整形するというのは、私にはびっくりだ。

可愛い子ほど整形するというのは、よく言われることでもある。実際、私のまわりでもそ

のパターンが多い。そして、彼女たちにくら「可愛い」と言っても何も響かないことを私は経験上知っている。むしろ、この自信のなさはどこからくるのだろう。美しさと自信は、必ずしもイコールにならないことは確かかなようだ。

「『可愛い』って言われて育った記憶がないんですよ。特にお母さんには言われたことがない。姉からもよく『アンタはブスだね』って言われてた。それを母に言うと『ブスの人でも頑張ってるんだから』と言うだけで、否定しないで。今回も父親に整形するって伝えたら『俺はポチの顔、別に変じゃないと思うけどなあ』とか言ってた。そこは可愛いって言えよ！　みたいな。父は褒めるのが下手なんです」

言ったほうは意識もしていないのかもしれないが、言われたほうは深い心の傷として残る。人格形成とは、このような日常の積み重ねで出来てしまうのだろう。

「小学生のころ、一人の男の子からずっと不細工って言われてたんです。給食の時間に席を付けるときも、『お前の顔見ると飯がまずくなる』とか『顔が腐ってる』とか言われてた。バスケのボールや、凍った硬い雪を、顔面に投げつけられたこともあります。でもその男の子のことは恨んでないんですよ。というのも、相手の子も不細工だったんですね。だからトラウマにならなかったのかな。むしろ家で姉に言われてたほうがコンプレックスに

なってる気がする」

小学校時代のポチちゃんを想像してみても、どう考えても不細工だったとは思えない。ということは、彼らの目的は、弱い者を攻撃してストレス発散することだったと考えたほうがわかりやすい。

「大人になってブスって言われることはないですよ。化粧して、カラコン入れて、まぶたに線を入れただけで、男性から好意を持たれることもあるし。それだけで変わるというなら拍子抜け」

美醜でジャッジされてきた女性は、その度合いが強いほど、美しさで近づいてくる男性に對して冷めたところがあるものだ。

「でも整形して気分が変わりました。最初は、目が腫れてガチャピンみたいだったから興奮気味だったんですけど、腫れが引いたら普通の顔になってきちゃった。整形イコール魔法みたいに美人になれるわけじゃないんだとわかったし、整形してもブスはブスだと思った。でも自分で決めて手術を受けたことに対しては精神的な満足感があります」

そのくらいドライな気持ちでいるほうが、健全なのかもしれない。

ところで、整形を決めたきっかけは鬱だったはずだ。鬱の原因は、図書館員の仕事を一月で辞めたことにある。一体何があったのだろう。

「図書館員の仕事は楽しいけど、お客さん対応は普通の店とは違うんですよね。迷惑行為をする人に対しても、優しく対応しないといけないし、ネットカフェと違って出入り禁止にできない。かまってもらいたくて、わざと注意されるようなことをするお客さんもいるんです。検索機の前で寝たり、椅子を移動して本棚の前で寝たり、館内で怒鳴ったりする。私はそんな人を『お客さん』だとは思わない」

そういえばポチちゃんは正義感が強かった。何が正しくて、何が間違っているか、自分の基準を持っている。ルールだから従う、というのとはできない性質だ。

「コロナ禍で業務縮小してからは、ネット予約された本だけを貸し出すようになったんですけど、年配の利用者から『パソコンなんか使わないからわかんないわよ』ってカウンターで怒鳴られたんです。『やり方を箇条書きにして書いて』と言われたけど、なんでそんなことしなくちゃいけないの思ったら、心が無になって手が動かなくなっちゃった。そしたら『この子、文字書けないんじゃないの?』『頭おかしいんじゃないの?』と怒鳴

られて。ほかのスタッフさんが助けてくれたけど、私はどうでもよくなっちゃった。なん
でほかのスタッフさんは、こんな人にまで優しくできるんだろう？ 具合悪くなって、ト
イレで吐こうと思っただけで吐けなくて、そのまま休むようになって辞めちゃいました」

接客業は、客から理不尽なことを言われても怒鳴り返すことができない。図書館員は公務
員に準ずる立場で、ますますその傾向が強かった。単に向いてない職業だっただけのように
も思えたが、ポチちゃんはこれまで十回以上は転職しており、そのことで自分を責めている
ようだった。

「なんでこんなことができないんだろう。やっと条件の良い仕事に受かったのに。私が我慢
すればよかったのに。これを期にリセットしたほうがいいかもしれない。そう思って、こ
れから就労移行支援というのに通おうと思ってるんです」

就労移行支援とは、精神障害、身体障害、知的障害、などの障害者がスキルを身に着け、
就職をサポートしてもらえる福祉サービスだという。つまり障害者枠で仕事をするというこ
とだ。

「私はこれまで、薬を飲んでいれば普通の人と同じように働けると思っていたんです。自分

は「まともな人」なんだって、ちょっとだけ思ってた。でもやっぱり私は何かが普通の人と違う。葉は一時的なものだし、嘘の元気。自分のことを障害者と認めて障害者枠で働いたほうが楽に生きられると思った。期待されない分ハードルも下がるしいいかなって。今まで仕事が一年以上続いたことがないから、目標は続けること。就労移行支援に通う条件として診断書が必要なんです。だから障害者手帳をもらいにいきます」

メンタルの病気で障害者手帳を持っている人は、私の周りにも何人かいる。けれど、実際に障害者枠で仕事をしている人は少ない。その分、給料が下がるし、対人関係を抜かせば仕事ができないわけではないという人も多いからだ。ポチちゃんが、障害者枠で仕事をすることを決意をしたということは、それほど切実な問題ということなのだろう。

「でも父親に電話で相談したら、嫌な反応されましたね。『それはちょっと自分を卑下しすぎだよ』と。私は前向きに考えた結果なのにな。『お前は障害者じゃない』とも言われて。確かに親からしたら認めるのは嫌なのかなと思うけど」

世の中は、器用に対応できるスキルばかりを求められる。けれど、ポチちゃんの話を聞くと、何も間違っていないように感じる。むしろおかしいのは、ルールだけで押し通す社会のほうだ。しかし、ポチちゃんはそのほうを思っていない。

「私はずっと、自分がおかしいのかなと思ってる」

そして現状打破のために美容整形をし、就労移行支援に通うことを決めた。自分を変えるために一生懸命なのだ。

『もっと自信を持ったほうがいいよ』と言われて、自信を持てる人はいないですよ。自分で行動しないと自信はつかない。仕事で鬱が悪化してしまって、それが整形するきっかけにはなったけど、でももう満足しました。自分の顔を許せるようになりました」

自尊心の高い人は、顔の美醜にかかわらず、自分に自信を持っている。でも生きていく過程で、自尊心をそぎ落とされた人もいる。本来は、自分の顔を「許す」「許さない」というものではないはずだ。けれどそうした思いを抱いている女性が多いのだろう。そして、そんな社会にあわせて自信をつけることは難しい。真にまともなのは誰なのか、私はたまにわからなくなる。

写真を通して「私」になる

偽りの姿ではなく、そのままの自分であるということは難しい。私がそこに折り合いをつけられたのは、写真家になってからだ。

そもそも何か作品づくりを始めようと思ったとき、それが写真だった理由は、単に家にカメラがあったことと、カメラの使い方を覚えたからだ。私が写真を始めた二〇〇〇年代初頭はまだフィルムカメラが主流で、今ほど写真が日常にはなかったのだ。

最初のころは、よくセルフポートレートを撮っていた。セルフポートレートの面白さは、自分で自分の好きな表情を撮れるところ。それまで、人から写真を撮られるたびに「こんなの自分じゃない」という気持ちを持っていた。それもそのはずで、私自身が「自分ではない何か」に擬態しているのだから違和感のある顔しか撮れなくて当然だ。でも、セルフポート



レートなら一人っきりの空間で、自分の世界に没頭してシャッターを切れる。誰の影響も受けていない「私がイメージする私」が撮れるのだ。それってどう違うの？ という質問に答えることは難しい。たぶんほかの人にはその微妙な違いなどわからないように思う。

私は声が柔らかいし、見た目が地味で自己主張が少ないから、それだけで「優しい」とか「お人よし」とか「女性らしい」の部類に入れられてしまう。そのことがとても嫌だった。本当の私は全然違う。自分のなかに、まだ自分でも見たことのないモンスターが眠っていて、それが「本当の私」だと思っていた。けれど、その肝心の自分がいっこうに出てこない。どうやったら出てくるのかもわからない。本来の姿になるまで私は真逆の姿でしか生きることができず、そのことがとてもストレスだった。セルフポートレートは、唯一そうした自分を表現できる方法でもあったのだ。

セルフポートレートの評判は良く、会う人、会う人に褒められるようになった。同時に、被写体を使った撮影もしていたけれど、圧倒的にセルフポートレートの評判がいいから、周囲からは「このままセルフポートレートだけを撮ったほうがいい」というアドバイスばかりされていた。

でも、私はその言葉を信じていなかった。セルフポートレートだけを続けて、仮に写真集を出せたとしても終わりが見えているからだ。すぐに飽きられるし、私も飽きる。そのときセルフポートレートしか撮れなかったら、次がない。そこに一点集中して努力するより、時



初期作品、セルフポートレート



写真を通して「私」になる

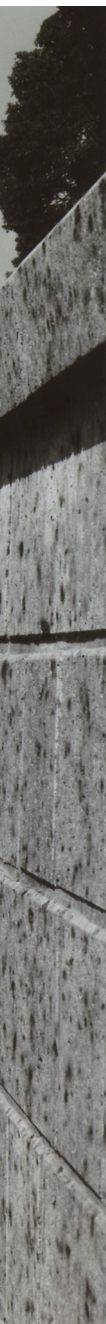
間がかかって人も人を撮れる技術を身に付けたほうがいい。

セルフポートレートは、撮影者も被写体も自分だから、自分一人で完結できるけれど、他者を撮るとなると意思疎通やイメージの共有が必要だし、私が思う通りに相手が動いてくれるとは限らない。仕上がりには必ずイメージのズレが出るので、それが大変でもあり面白いところでもある。当時の私にとっては、セルフポートレートより被写体を使って撮るほうが、はるかに難しいことだったのだ。

まだSNSもない時代で、ホームページを持っている人も少なく、まして女性で写真を撮っている人などネット上にはほほいしない。だからモデル募集をかけると、あっという間に人は集まった。

撮影前に「相手の人生を聞く」というスタイルは初めからで、意識して始めたわけではない。まずは相手を知ってからと、単純にそう思っていただけだ。

が、始めてみるとこれが面白い。それまで私の周りには、自分と同じように東京出身で、同じ学校に通うなどとして、同じ文化のなかで育った人がほとんどだった。その狭い人間関係が全世界だったのだ。ところが、いきなり世界が広がって、様々な境遇の人に出会うことができる。離島から出てきた人、不登校児だった人、LGBTQ+の人もいたし、精神疾患を抱えている人や、役者志望など、これまで出会ったことのない種類の人達と一気に知り合うことができた。





もちろん、「話を聞く」といっても、当初はそこまで深く掘り下げられたわけではない。私自身が若くて経験がなかったし、被写体は年上が多かった。自分が知らないことを理解するのは難しい。それでも、撮影より話を聞くことのほうがはるかに楽しかった。

逆に撮影は、技術もないのでイメージ通りに撮れないし、露出不足で失敗することも多々あった。楽しむ余裕などまったくくない。場所をどこにするか、衣装は何を着るか、スケジュールを組んだり、必要なものを揃えたりと、もろもろを考えるとどうしても腰が重くなる。けれど作品として形にしないことには人に見せることはできない。私はやる気があろうとなかろうと、どんどんスケジュールを組んで強引に動いていった。不思議なもので、どんなにやる気がなくても、頭が回っていなくても、撮ってしまえば良い作品が出来る。モチベーションと作品の質は、あまり関係がないと私は今でも思っている。

さて、撮影しながらいろんな人の人生を聞き取っていたものの、そのころはまだその人の語りと写真とがダイレクトに結びついてはいなかった。むしろどちらかといえば、被写体を使って私の心象を映しているという要素のほうが強かったと思う。人を撮っていても、それは他者を使ったセルフポートレートに近かったのだ。そしてやはり、セルフポートレートのほうが楽しかったし評判も良かった。

けれど、数年が経つと徐々に逆転し始めた。他人の人生を知るにつれ、自分の人生は何てあり来たりでつまらないものだろうと思うようになり、自分への興味が薄れていったのだ。

それまで自分自分だったが、他人の人生のほうがはるかに面白い。しかも、人間は一人ひとり全然違う。社会では属性でひとくくりにされがちだけど、実際は「個性」なんて言葉が必要なくらいみんな違う。いくら平凡な育ちでも、特別な人生を送っていないくても、心のなかを掘り下げていけば、それぞれオリジナルな思考を持っているのだ。ただ、日常でそれを口にしないだけ。受け止める人間がいらないから喋らないだけ。その事実を知ったとき、私はとても興奮した。人の心ってなんて面白いんだろう！

編集プロダクションを辞めてからは、フリーで編集やライターやカメラマンの仕事ももらいつつ、映像制作の会社で働いていた。その合間に、せっせと作品を撮っていると、会社からも、ほかにやりたいことがある人だと思われてしまう。結局、会社の事業撤退を期に「辞めていいよ」と言われてしまい、二十六歳のときに完全にフリーランスになった。そうした形で会社を去るのは三度目だった。

よく、フリーになるには覚悟があると言われるけれど、私の場合は、会社組織からすぐ追い出されてしまうのもう諦めた、というネガティブな理由だ。

そこから今に至るまでフリーランスで仕事をしているけれど、写真家として世に出るまでは果てしなく長かった。出版業界で仕事はしていたものの、それは相手の要望通りに撮るだけで、作品とはまた違う。

どうしたら自分の作品で評価されるのか、その方法はさっぱりわからなかった。

写真を撮っていれば人生は順調などという、単純な図式にはならない。二十代のころは、自分が幸福感を得るためには何をしたらいいのか、そればかり考えていた。世の中には、特別なことをしなくても楽しそうにしている人がたくさんいるけれど、私にはその感覚が皆無だった。私は普通に生きているだけではちっとも心が満たされないし、いとも簡単に死にたくなってしまふ。どうしたら生きていて楽しいと思えるのか。どこを目指せば自分にとって正解なのか。悩んだ末に考えたのが、私の幸福段階仮説だった。

- 1 好奇心第一で仕事をし
- 2 その仕事が結果的に社会の役に立ち
- 3 お金が後からついてくる

この順番で手にいれていけば、私は幸福感を得ることができたらうと考えた。この順番が入れ替わっては意味がない。お金だけあったところで、私は幸福にはなれないからだ。それに自分の仕事が社会悪に繋がっても意味がない。会社にいたころはそうした仕事もしていたのでよくわかる。逆に社会の役に立つかどうかは、自分のなかだけで確信があればそれでいい。そして何より、仕事は好奇心と探求心が一番にあることが健康的で、そうでないと苦痛なだけだと思う。その上でお金を手にしたら、怖いものなどなくなるのではないか。そう思っているが、まだそこに達していないのでわからない。ちなみにこれは幸福が基準なので、

経済を優先したらまったく違うものになるだろう。

初めてギャラリーで個展をしたのは、二十七歳のときだった。場所は「新宿ニコンサロン」。作品を応募して審査に通ると展示ができる仕組みだ。ニコンサロンは若手作家をバックアップする意識が強く、使用カメラを問わず、応募料や場所代などの余計なお金がかからないことも魅力だった。当時の私は、あり金すべてを作品制作に使っていて、まったく余裕がなかったのだ。

個展がスタートすると、それまでホームページを見てくれた人たちが大勢来てくれた。そのほとんどは、「写真展を見に行く」という習慣のない人たちだ。写真好きの層とは違うため、普段の「ニコンサロン」とは、だいぶ違う客層になったらしい。目の前で直接リアクションを聞けることは、とても刺激的だった。

写真家として知名度を上げるには、写真のコンテストで賞を取るなどして目をかけてもらうケースが圧倒的に多いと思うけれど、私はそうしたものには早々に参加しなくなってしまった。このときの展示があまりにも楽しく、「コンペ」より「個展」という意識が強くなったからだ。

このころから、なぜか毎年のように海外からグループ展のオファーをもらうようになった。海外のキュレーターは、自分が良いと思ったら、有名無名にかかわらず声をかけてくれる。

日本の場合とは逆で、まずは名前が知られていないとチャンスが来ない。そこが大きく違った。海外で展示をしていると、必ず作品に説明が求められる。作品に言葉がついて初めて美術作品として見なされるのだ。私は写真も独学だし、美術の勉強もしたことがなかったから、そうしたことは海外の展示で初めて学んだことだった。

それまで何となく被写体の話を聞いて写真に落とし込んできたものを、より具体的に「なぜこのイメージになったのか」を説明できるようにならなければいけない。作品にテキストを付けるようになったのは、それからだいぶ後の事だけど、より「人」にフォーカスする作品づくりに変わってきたのは、このころからだ。

私は英語が話せないので、自分から海外に売り込んだことは一度もなかったけれど、いろんな国の人が声をかけてくれて、海外の雑誌で紹介されることもあった。なので、日本でまったくチャンスが巡ってこないことが、私には不思議だった。出版社に持ち込みをしても、「作風を変えたほうがいい」というアドバイスばかりで、まったく理解してもらえない。

同じ年や年下の写真家たちが、どんどん評価され写真集を出版しているのに、私にはまるで縁がなかった。

世の中で理解されないまま十年以上も作品づくりを続けるということは、誰よりも自分で自分を評価していないとできないことだ。今でも私は、私の一番のファンは私だし、私を一

番に評価しているのは私だし、私の写真をもっとも理解しているのは私だと思っっている。自分を超える人はこの先もないだろう、そう思っているが最近は少し揺らいでいる。以前、「小学生のころからずっとホームページを見てました」という子が、フラーと個展に現れ、居合わせたお客さんに作品解説をはじめたことがあったからだ。それが、私にはまったくない視点で、面白い角度からの洞察だったので、もしかすると私より私の作品を知っている人がいるのかもしれないと、このときは空恐ろしく思った。

最初の写真集『やっぱ月帰るわ、私。』(赤々々二〇三三)を出版したのは、三十三歳のときだった。その前年、私はイタリア人のキュレーターに声をかけられ、イタリアの美術ホテルで五カ月間ほど個展をしていた。その会場でなぜか「日本では活躍している人」と勘違いされたので、私もそのフリをしていたけれど、当時はさっぱり無名である。今も一般には知られていないけれど、当時は写真業界にも、私を知っている人はほとんどいなかったのだ。

写真集が出て作品が世に出るということは、それだけで私にとっては世界が変わる出来事だった。一番変わったのは、私自身だ。心の変化がとにかく大きい。とんでもなく自己肯定感が上がったし、擬態せずとも私そのまま「ただそこにいる」ことができるようになった。健全な精神状態というものを、生まれてはじめて経験した気分だった。こと私に関しては、社会で認められることと精神安定は正比例する。仕事で評価されること以外で、満足できることはないし、自信に繋がることもない。そこがほかの人と大きく違う点だと思っっている。

とはいえ、写真集を出したところで、そこから仕事が回り出すということはなかった。展示を見た人から「写真の意味がわからない」と言われることも多く、まだまだ理解されているように思えなかった。

すでに、被写体の女性たちが語った言葉からインスピレーションを得て作品を撮る、というスタイルになってはいたけれど、ダイレクトに言葉を付けたのは、さらにそこから時間を経て、二〇一八年末に出版した写真集『理想の猫じゃない』と『ふあふあの隙間』（赤々きからだ）。

背景にあるエピソードを言葉にすると、「意味がわからない」という人がいなくなっただけには驚いた。私は、「あとがき」でもかなり具体的に作品説明を書くタイプだが、写真表現は書けば書くだけ伝わるのだということをこのときに実感した。

私が何者であるかが他者に伝わるようになる、ようやく人と人としての自信がついたように思う。隠れていた「モンスター」も、気づけば私と完全に同化していた。

私にとって「私」になるということは、これほど時間のかかることだったのだ。